

「アビスパ福岡」サポーターのゲーム観戦における享受形態

深田 忠徳*

The Enjoyment in watching the game by “AVISPA FUKUOKA” supporters

Tadanori FUKADA*

はじめに

アビスパ福岡のホームスタジアムである「レベルファイブ」において熱狂的なサポーターグループが存在する。ホームA自由席に陣取る「ウルトラ・オブリ」（以下、「オブリ」と略する）である。彼らは、他のサポーターグループを凌駕し、その圧倒的存在感でアビスパ福岡の応援を煽動する。彼らは応援という相互的行為を通してサッカー観戦を享受している。

本研究では、アビスパ福岡のサポーターグループ「オブリ」に着目し、彼らがスタジアムでの互惠的営みにおいて生成される相互的関係性を「アビスパ福岡」ホームゲームでのフィールドワーク及び「オブリ」サポーターへのアンケート調査によって考察し、「サポーター研究」の一資料とすることを目的とする。

方法

アンケート調査は、「オブリ」のリーダーが主催する「アビスパ福岡サポーターAWARDS」において実施した。実施日は2007年12月8日。質問紙配布数は74、有効回答は68であった。質問紙では、「メンバー同士の関係性」、「応援パフォーマンス時の意識・態度」、「地域への帰属意識」に分類し調査を行った。

結果及び考察

1) メンバー同士の関係性

①サポーター活動の参加経緯からみた享受形態の多様性

まず、「オブリに参加したきっかけ」については、「福岡にプロサッカーチームができたから（30代、

女性）」、「アビスパをサポートしたいから（20代、男性）」、「サッカーが好き、福岡が好き、盛り上げたい（40代、男性）」、「ホームA席を見ていて楽しそうだったから（20代、女性）」とそれぞれの経緯は様々である。さらに、「オブリに参加することのメリット」については「一体感などの日常生活では味わえない快感が味わえる（30代、女性）」、「アビスパのコミュニティに加われる（40代、男性）」、「仲間が増え情報交換や交流が出来る（40代、女性）」、「勝ったときの達成感がちがう（20代、男性）」とそれぞれのメンバーの享受形態が多様であることが伺える。

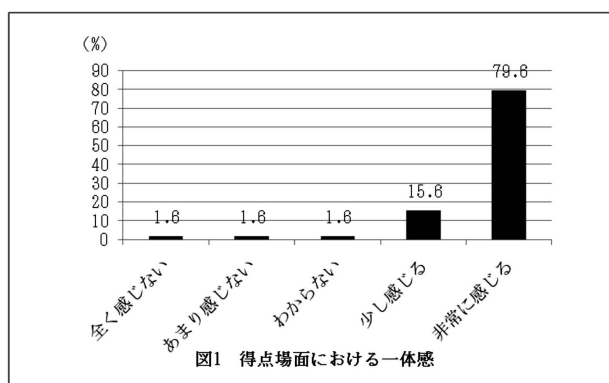
②サポーター同士の一体感

サッカー経験の有無、オブリの活動に従事した年数、一緒に観戦に訪れた仲間の存在等々が観戦する際に影響を及ぼすことは明白であり、メンバーそれぞれのサッカーに対する観戦形態は質的差異があると言えよう。しかしながら、彼らはゲーム中における様々な場面に応じて互いに共鳴したり、歓喜のあまり激昂状態にまで至ることもある。そのような過程のなかで、彼らは他者との相互的関係性を構築していく。「オブリの一員として応援することの魅力」については、「サポーター同士の一体感を感じられる」29%、「みんなで一緒になって騒げる」25%、「一人で応援するより盛り上がる」21%、とサポーターグループとして他者との紐帯において共に応援することに魅力を感じている。他方、「自分をさらけ出せる」といった自己を中心とした享受形態は、全体の5%であった。

*）九州共立大学スポーツ学部

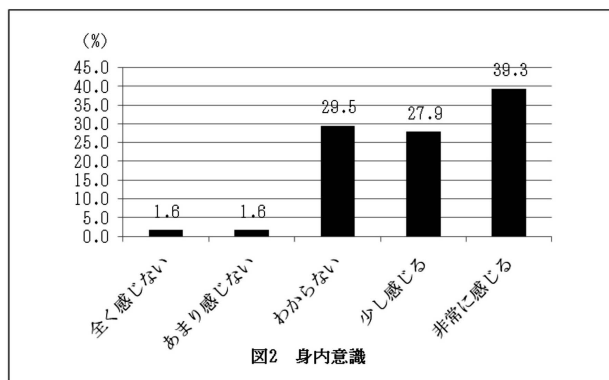
*）Kyushu Kyoritsu University Faculty of Sports Science

サポーター同士が互いに溶解していく場面は様々なシーンで起こりうるが、とりわけゴールシーンにおける彼らの感情的発露はスタジアム全体を興奮の坩堝へと誘う。図1で示すように「得点場面ではサポーター同士の一体感を感じますか」の質問に対して「非常に感じる」と回答した者が全体の約80%を占める。サポーターにとってサッカー観戦におけるゴールシーンは、自己の感情的発露とともにメンバー同士の共有体験を通してオブリメンバーとしての一体感を醸成するものであるといえる。



また、オブリの活動を通して形成されるメンバー間の一体感が互いを「身内」と感じるようになる。

「スタジアムにおいて知り合いになったメンバーの有無」については、全体の91%が知り合いになったメンバーの存在を認めている。さらに、「オブリのメンバーに『身内』意識を感じますか」という質問に対して「非常に感じる」、「少し感じる」と肯定的な回答が全体の67%を占めた(図2、参照)。このような関係性構築に寄与しているのは、何も応援活動だけとは限らない。



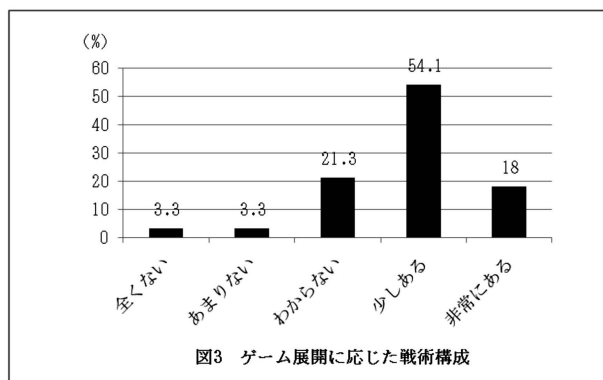
彼らの応援準備はスタジアム開門と同時に始まる。

スタンドにはバンデラを垂れ流し、選手やチームの横断幕とともに「オブリ」独自の横断幕をスタジアムに掲げる。また、ゲーム終了後の清掃も自らが行う。興味深いことは、そのような作業の担当や当番などは明確に定められておらず、メンバーの自主性を抛り所に行っている点である。そういった活動を通して、互いの協同作業がもたらすメンバー間の関係性はより一層深まりあるものへと転じていくのである。

2) 応援パフォーマンス時の意識・態度

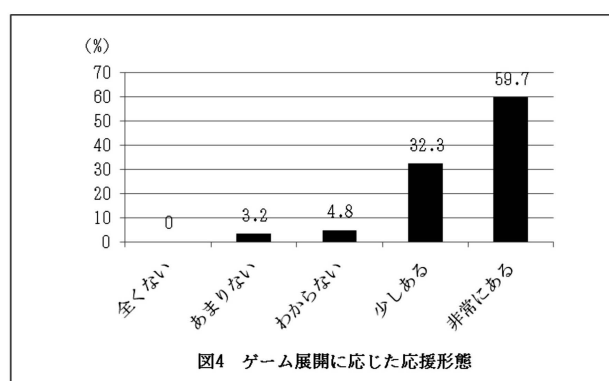
①戦術的展望に沿った観戦形態

オブリのメンバーは、ゲーム開始から一気にヒートアップしていく。独自で作成した応援歌を歌い、手を振り上げ、飛び跳ねる。なかでも、彼らが「コア」と呼ぶ、オブリのリーダーを取り囲んだ中心的位置は、そのパフォーマンスも過激になる。縦に揺れるだけでなく、横にも激しく動き、時にはバンデラを支えにして手すりに上がり応援を一層盛り上げようと他のサポーターを煽る。彼らのそのようなそぶりは、一見、自己の感情に身を委ねたまま応援パフォーマンスを楽しんでいるように見受けられる。



しかしながら、彼らは戦略的展望を付帯しながらゲームを観戦し享受している。「ゲームを観ていてその場に相応しい戦術を頭の中で構成することがありますか」の質問には、「非常にある」「少しある」と72%の肯定的意見が得られた(図3、参照)。さらに、「ゲームの流れの中で『ここはさらに声を出して盛り上げないといけない』と感じるときがありますか」の質問には、「非常にある」「少しある」と92%もの肯定的意見が得られた(図4、参照)。このことより、オブリのメンバーは一定の応援パフォーマンスを継続しているだけでなく、ゲームの展開を

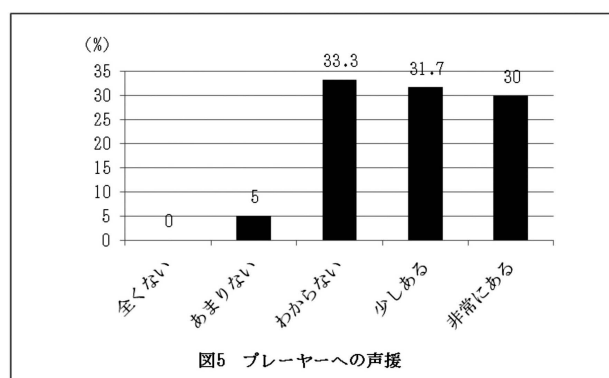
先読みしながら、自己のサッカー観においてゲームを分析して、個々がそれぞれに抱く戦術的観点からゲームを観戦している。その戦略的展望に立った見方が、絶えず変化する状況のなかでも、その場面毎の展開に応じて応援パフォーマンスにも変化をもたらすのである。



②プレーヤーとの関係性

オブリのメンバーがスタンドで発する応援歌やコールは、プレーヤーへ自らの気持ちをストレートに伝達するためのツールとしてその機能を果たす。彼らは、ピッチ上で全力を出して戦うチームやプレーヤーのことに想いをめぐらし、そこで喚起される感情をラブソングにして披露する。そういった彼らの行為は、プレーヤーと彼らとの「距離の縮小」を明示している。

彼らの特定のプレーヤーに対するコールについて「ご自身の声援がプレーヤーへ届いたと感じることがありますか」の質問には、「非常にある」「少しある」と肯定的な意見が約60%であった（図5、参照）。



さらに「声援が届いたと感じた状況」については「プレーヤーが良いプレーをした時（20代、女

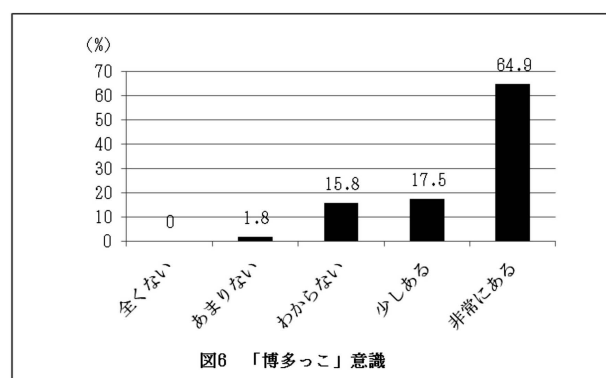
性）」、「苦しみながらも必死に走る姿を見た時（10代、男性）」、「応援していてその選手がゴールを決めたとき（20代、女性）」、「声援によってラインから出そうなボールに追いついた時（30代、男性）」と回答している。つまり、彼らは自らの応援歌やコールがプレーヤーを後押しし、それがプレーヤーのパフォーマンスに影響を及ぼすと考えている。確かに彼らの応援形態をスタンドから観察すれば、応援歌やコールがゲームのテンションを左右しているといえる。しかしながら、彼らの声援がプレーヤーの全てのパフォーマンスに効果的に作用することは想像に難しい。従って、オブリのメンバーは自己の想いを応援歌やコールという形にしてプレーヤーやチームを鼓舞し、自らがゲームに参加することによってゲームコントロールを可能にしているという観点からサッカー観戦を享受していると考えられる。

3) 地域への帰属意識

①応援による地域アイデンティティの形成

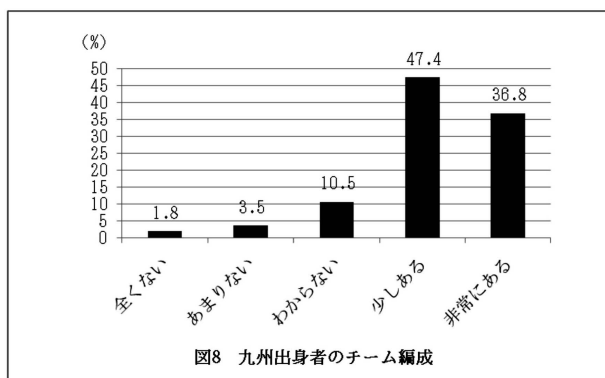
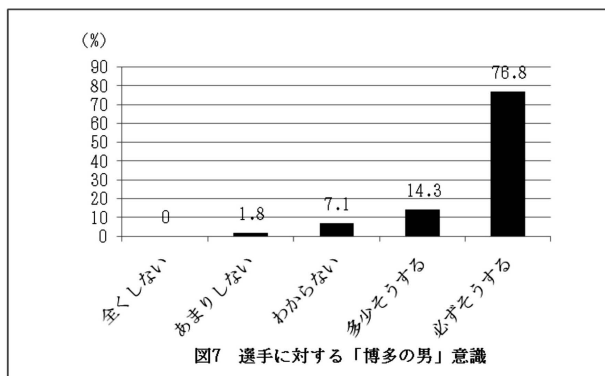
アビスパ福岡が攻勢な状況になると、スタンドでは「オイッサ、オイッサ」の掛け声を大呼する。これは、博多の伝統神事「博多祇園山笠」で山を担ぐ男達が発する掛け声である。博多特有の掛け声が、サッカーのゲーム中にも沸き起こることによってサポーターのエキサイトメントは高揚していく。そのような応援を通して、彼らの地域アイデンティティが醸成されていくこともサポーターとしてのひとつの醍醐味であろう。

『『オイッサ!』や『博多の男なら一気持をみせろー…』といった『オブリ』の応援からご自身が『博多っ子』であると感じますか』の質問には、「非常に感じる」「少し感じる」と肯定的意見が全体の約80%を占める（図6、参照）。博多・福岡という地域性を盛り込んだ応援は彼らの得意とするところでもあり、そのことによって自己のアイデンティティを確立していくと考えられる。



②地域性を媒介にしたプレーヤーとの関係性

また、自らを「博多もん」と位置付ける意識は、メンバー間だけではなくプレーヤーにも波及していく。「福岡出身ではない選手がアビスパのユニホームに袖を通したらその選手を『博多の男』としてみなし応援しますか」の質問には、「必ずそうする」「多少そうする」と肯定的意見が90%にも及ぶ(図7, 参照)。さらに、「将来的には、全ての選手が九州出身者で構成されたアビスパを観てみたいという願望がありますか」の質問に対して「非常にある」「少しある」と約80%の肯定的意見が得られた(図8, 参照)。このことから、オブリのメンバーは「福岡」あるいは「九州」という枠組みのなかで自己の地域アイデンティティの確立を図りながら、プレーヤーに対しても自らの領域に取り込もうとする意識において、「地縁」関係で結ばれた関係構築を求める。



今後の展望—まとめにかえて—

本研究では、アビスパ福岡サポーターグループである「オブリ」に焦点を当て、彼らの相互行為を中核としたメンバー間の関係性を考察し、「メンバー同士の関係性」、「応援パフォーマンス時の意識・態度」、

「地域への帰属意識」に分類して、彼らがゲーム観戦を享受する際の意識や態度を明らかにした。しかしながら、彼らの相互作用がもたらす関係性構築のメカニズムについては考察が及んでいない。ここに彼らを結びつける「組織の基本原則」を探究する必要性が生じてくる。

したがって、今後の研究では、互いの相互行為を通して構築するサポーターの関係性の様相を日本中世からの文芸であった俳諧連歌にみる「連なり」(田中[2008])と対置して、「オブリ」がスタジアムにおいて生成する場のダイナミズムを考察する。

その「連なり」のなかで「述語的統合」(西田[2003], 長尾[1960], 鈴木[1977])を媒介として自己を形成する彼らの享受スタイルに着目する。さらに、「オブリ」の組織については、年齢・性別・職業に影響されない水平的な「ネットワーク」(朴[2003], 池上[2005])を構築して、開放性と流動性が内在した「弱い紐帯が持つ強さ」(M.グラノヴェッター[1973], 鹿又[1991])を付帯していることを考察する。

文献

- 西田幾多郎(1927): 西田幾多郎全集4, 岩波書店
 長尾訓孝(1960): 西田哲学の解釈, 理想社
 鈴木 亨(1977): 西田幾多郎の世界, 勁草書房
 田中優子(2008): 江戸はネットワーク, 平凡社
 Granovetter, Mark S[1973]: "The Strength of Weak Ties." American Journal of Sociology, 78:1360-1380
 野沢慎司(編)(2006): リーディングス ネットワーク論, 勁草書房
 鹿又伸夫(1991): 弱い紐帯の強さ—社会関係のネットワーク, 小林淳一・木村邦博(編): 考える社会学, ミネルヴァ書房
 池上英子(2005): 美と礼節の絆—日本における交際文化の政治的起源, NTT出版株式会社
 朴 容寛(2003): ネットワーク組織論, ミネルヴァ書房